

天才級幼児の研究

(優秀知能児に関する研究)

研究第5部 村山 貞雄
上野 己美子

I 目 的

天才級幼児に関する研究は、今までにも多く行なわれているが、今回は、当研究所教養相談室へ来所したIQ150以上の子どもと、IQ97~103の子どもの比較しその

的

特徴を調べた。
なおこの調査に当たって谷口恵子氏の協力を得た。ここに、あつく感謝する。

II 天才児の人数

天才級幼児の出現頻度は、その選択規準によって異なる。一般にIQ160以上の子どもは、0.01%つまり1万人中1名ぐらいと推定され、またIQ150以上の子どもは0.1%つまり千人に1人ぐらいであると考えられる。

昭和41年度と42年度(1966:4~1967:3)に、当研究所教養相談室を訪れた5,722人のうち、IQ160以上の子どもは8人で、全体の0.14%であった。またIQ150以上の子どもは44人で、0.77%であった。(なおIQ148以上の子どもは55人で、約1%であった)。

しかしこの結果は、東京といった大都市のなかでも、高い相談料を支払って当研究所を来訪するような家庭の子どもであるから、東京都、さらに地方を含めた日本全国の出現率を考えると、その割合は、これよりも大幅に減少することが予想される。

参考のため、第1~2表を掲げてみよう。第1表は、鈴木治太郎が大阪市の児童約13,000名について調査して検出した優秀知能児973名と、ターマンがカリフォルニアに住む世界諸民族の学校児童中から選抜した優秀知能児461名とを比較したものである。これによると、両者の出現率が一致している。

第2表は、鈴木治太郎が前記の大阪市の児童について調査した結果と、東京大学医学部脳研究室が同じ方法で東京都の児童5,200余名について試みた結果とを比較したものであるが、大阪群のIQ頻度は、IQ130以上において、東京群のその、約2分の1となっている。このような大都市以外の地方であれば、IQ頻度はもっと減少することが予想される。

第1表 日米優秀児の出現度(鈴木治太郎)

I Q	日 本	米 国
200	1	1
195	1	0
190	1	2
185	2	2
180	4	10
175	9	8
170	13	20
165	35	27
160	79	43
155	138	64
150	265	134
145	425	150
計	973	461
Mi	151.16	153.00
M	153.21	155.25
基礎児童数	350000	168000
存 在 率	0.00278	0.00274

第2表 IQの出現頻度(鈴木治太郎)

I Q	大 阪	東 京
160 以上	0.02	0.09
150~159	0.08	0.19
140~149	0.42	1.24
130~139	1.95	3.65

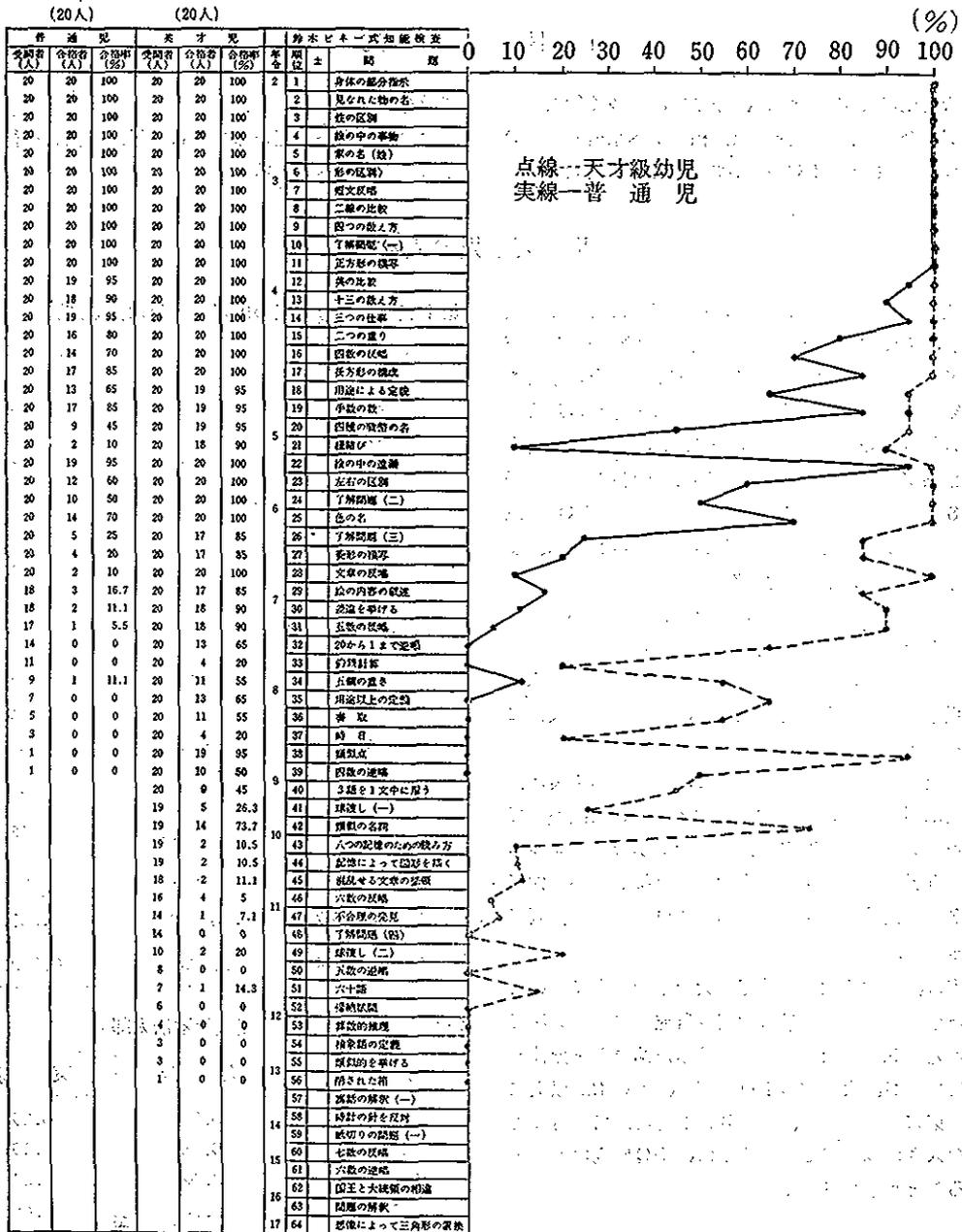
Ⅲ 対象児と研究方法

昭和41年度と42年度に、当研究所の教養相談室を訪れた5,722人(♂3,278, ♀2,444)の子どものなかから、I-Q150以上の子どもを選ぼうとしたが、それでは44人(♂14, ♀30)しかおらず、人数が少ないので、昭和40

年度に来所した子どもからも、16人(性はアット、ランダムに)選び、計60人(♂21, ♀39)を天才級幼児群とした。

以下、このレポートにおける天才級幼児とは、この天

第1図 各問合格者率(5歳児)



才級幼児群をさす。天才級幼児群のなかで一番知能指数の高かったのは、I Q174(♀1)であり、つづいてI Q171(♂1)、I Q170(♂1)、I Q164(♀1)、I Q163(♀2)……となっている。

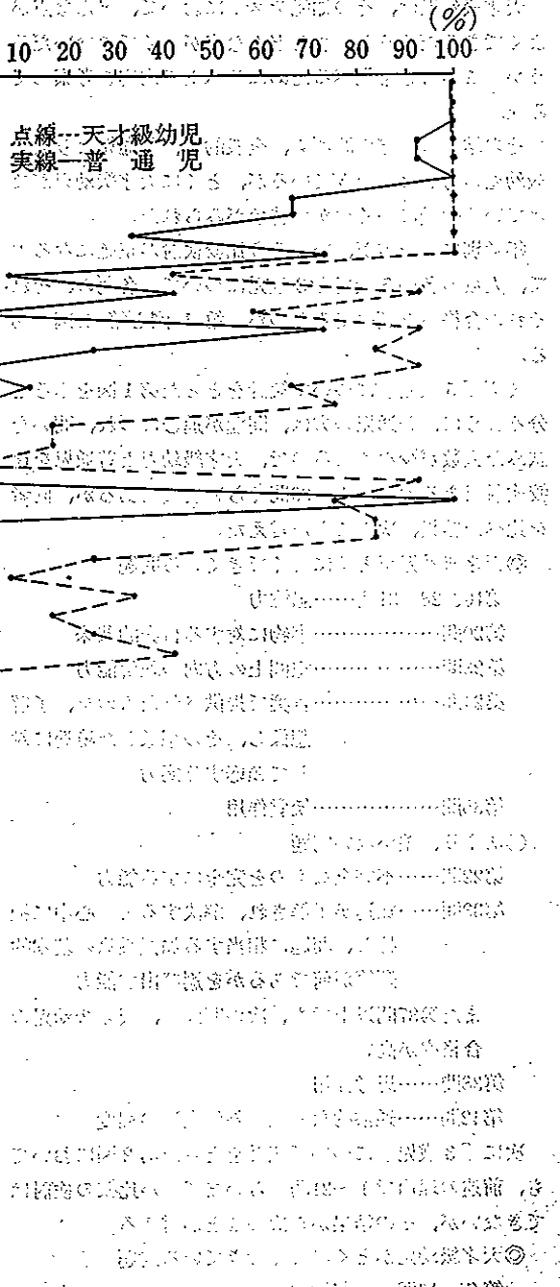
一方、それとたいする普通児群として、同じ時期に当

第2図 各問合格(3歳児)

普通児 (12人)			天才児 (12人)			問	正答率 (%)
各問者 (人)	合格者 (人)	合格率 (%)	各問者 (人)	合格者 (人)	合格率 (%)		
12	12	100	12	12	100	1	身体の部分指
12	12	100	12	12	100	2	見られた物の名
12	12	100	12	12	100	3	姓の区別
12	11	91.7	12	12	100	4	絵の中の動物
12	11	91.7	12	12	100	5	家の名(姓)
12	12	100	12	12	100	6	形の区別
12	8	66.7	12	12	100	7	短文区別
12	8	66.7	12	12	100	8	二語の比較
12	4	33.3	12	12	100	9	四つの数え方
11	8	72.7	12	12	100	10	了解問題(一)
12	1	8.3	12	5	41.7	11	正方形の構成
12	5	41.7	12	11	91.7	12	数の比較
12	0	0	12	7	58.3	13	三角の数え方
11	6	72.7	12	11	91.7	14	三つの仕事
12	3	25	12	10	83.3	15	二つの重り
11	0	0	12	11	91.7	16	四数の区別
9	1	11.1	12	8	66.7	17	長方形の構成
9	0	0	12	9	75	18	用意による区別
8	0	0	12	2	16.7	19	手探の数
7	0	0	12	2	16.7	20	四種の貨幣の名
6	0	0	12	0	0	21	絵結び
1	0	0	12	11	91.7	22	絵の中の道幅
1	1	100	12	9	75	23	左右の区別
0	0	0	12	10	83.3	24	了解問題(二)
1	0	0	12	10	83.3	25	色の名
1	0	0	12	3	25	26	了解問題(三)
1	0	0	12	1	8.3	27	葉形の模写
1	0	0	12	4	33.3	28	文章の区別
1	0	0	12	2	16.7	29	絵の内容の叙述
0	0	0	12	3	25	30	逆道を挙げる
0	0	0	12	5	41.7	31	五数の区別
0	0	0	9	0	0	32	20から1まで逆順
0	0	0	7	0	0	33	算数計算
0	0	0	7	0	0	34	五個の長さの区別
0	0	0	7	0	0	35	用途以上の区別
0	0	0	6	0	0	36	書 取
0	0	0	5	0	0	37	時、日
0	0	0	5	0	0	38	規則的
0	0	0	5	0	0	39	四数の逆順
0	0	0	4	0	0	40	3語を1文中に用う
0	0	0	4	0	0	41	球投し(一)
0	0	0	4	0	0	42	原料の名簿
0	0	0	4	0	0	43	六つの記号のための数え方
0	0	0	4	0	0	44	記憶によって図形を描く
0	0	0	4	0	0	45	混乱せる文章の区別
0	0	0	4	0	0	46	六数の区別
0	0	0	4	0	0	47	不合理の見聞
0	0	0	4	0	0	48	了解問題(四)
0	0	0	4	0	0	49	球投し(二)
0	0	0	4	0	0	50	五数の逆順
0	0	0	4	0	0	51	六十個
0	0	0	4	0	0	52	埋納区別
0	0	0	4	0	0	53	算数的推理
0	0	0	4	0	0	54	抽象図の定義
0	0	0	4	0	0	55	原料を挙げる
0	0	0	4	0	0	56	閉された箱
0	0	0	4	0	0	57	高級の解法(一)
0	0	0	4	0	0	58	時計の針を区別
0	0	0	4	0	0	59	紙切りの区別(一)
0	0	0	4	0	0	60	七数の区別
0	0	0	4	0	0	61	六数の逆順
0	0	0	4	0	0	62	国王と大統領の相違
0	0	0	4	0	0	63	問題の解法
0	0	0	4	0	0	64	想像によって三角形の構成

ども60人(♂21、♀39)を選んだ。以下、このレポートにおける普通児とはこの普通児群をさす。

研究方法は、英才児調査票を制作した。そして上記対象児に関する主訴や、家庭的背景、出生状況や健康歴、知能テストなどをカルテから書き写し、不備なものはそ



の母親に電話か手紙でたずねて、これを補充した。そしてこの英才児調査票(省略)をもとにして天才級幼児と普通児とを比較検討してみた。

IV 天才級幼児の知能の特徴

(1) 知能の内容

天才級幼児は、その知能テストにおいて、どんな点がよくできるだろうか、またどんな点がよくできないだろうか。このことを調べるためにテストの内容を考察してみた。

その結果は、どの問題も、全般的に、普通児より天才級幼児の方がよくできているが、とくに天才級幼児ができていない問題にいくつかの特色がみられた。

年齢別にみた方が、いっそう比較検討が正確になるので、人数の多い5歳児と3歳児について、各問の、それぞれの合格率を調べてみたのが、第1図と第2図である。

まず「5歳児」について統計をとった第1図をみると分るように、普通児の方は、問題が進むにつれ、問いを試みた人数が少なくなるので、天才級幼児と普通児を比較検討できるのは、1~36問ぐらいまでであるが、両者を比べた結果、次のことが言えた。

◎天才級幼児がとくによくできている問題

第16、28、31問……記憶力

第20問……事物に対する自発的興味

第23問……空間上の方向の理解能力

第24問……言葉で提供されたものを、了解想像し、その想像した境遇に対して順応する能力

第35問……統覚作用

○あまり、差がない問題

第22問……不完全なものを完全にする能力

第33問……陳述が了解され、解決するまで心中に把握し、問題に相当する加減乗除の基本的運算が何であるかを選び出す能力

また第37問以上でも、次の問題は、天才級幼児の合格率が高い。

第38問……思考作用

第42問……通俗的な概念の外延発達の程度

次に「3歳児」について統計をとった第2図においても、前述の理由で1~21問ぐらいまでしか比較の検討はできないが、その結果から次のことが言える。

◎天才級幼児がとくによくできている問題

第7、16問……記憶力

なおここに使われた知能テストはすべて個人用知能検査である。

第8問……命令の了解力、注意力、比較力

第9問……自発的興味

第18問……統覚作用

○あまり差がない問題

第17問……構成能力

第21問……普通の客観物に対する興味

また第22問以上でも、次の問題は天才級幼児の合格率が高くなっている。

第28問……記憶力

第31問……記憶力

次に、参考までに作ったのが第3表である。これは、各児童の得点よりやさしい問題(たとえば、得点が21点だとすると、第20問以下をさす)における- (つまり不合格)と、得点より難しい問題における+を調べたものであるが、前者を、各児の不得意な問題、後者を得意な問題と考えたものである。この表からも、天才級幼児が記憶力を要する問題(数字や文章の逆唱や反唱)を得意としていることが、よくわかる。

(2) テスト中の行動記録

次に、知能検査実施中の天才級幼児の行動はどうであろうか

当研究所相談室では、知能テストを行なう場合、必ず別紙のような“テスト中の行動記録”をつけている。それを、普通児と比較してみたのが第3~9図である。

(A) 同伴者から離れるときの様子(第3図)は、両者にあまり差は見られず、両者とも「すぐ離れる」子どもが、約80%を占めている。

(B) 問いに対して(第4図)は、「主旨をよくつかんで答える」「よく考えて答える」「思っていることをうまく表現する」「ものがはっきり言える」など、好ましい面が天才級幼児には、めだって多い。

(C) 分らないとき(第5図)は、「考えてから分らないと言う」が、天才級幼児には一番多い。「すぐ分らないという」「黙ってしまう」というような、問いに対して消極的な者が多い普通児に比べ、天才級幼児は問いに対して積極的であり、耐久性があることが分る。

(D) おちつき(第6図)については、両者とも「普通」が多いが、天才級幼児の方は、「おちついている」がそれに次いで多く、普通児に比べ、好ましくない面が少な

第3表 得点番号以下の+以上の+ (3歳以上)

年 令	順 位	問 題	天才級幼 児		普通児		年 令	順 位	問 題	天才級幼 児		普通児			
			受 問 者	+ 人	受 問 者	+ 人				受 問 者	+ 人	受 問 者	+ 人		
2	1	身体の部分指示	54		54		9	39	四数の逆唱	23	1	6	3	1	3
	2	見なれた物の名	54		54			40	3語を1文中に用う	19	1	8	2		2
	3	性の区別	54		54			41	球捜し(一)	15	1	7	1		1
	4	絵の中の事物	54	1	53	1		42	類似の名詞	23	1	15			
	5	家の名			52	2	10	43	八つの記憶の為のよみ方	7	3	3			
3	6	形の区別			54			44	記憶によって図形を描く	8	1	2			
	7	短文反唱			50	5		45	混乱せる文章の整頓	10	1	4	1		1
	8	二線の比較	54	1	49	5	11	46	六数の反唱	10	3	7			
	9	四つの数え方	54	1	44	6		47	不合理の発見	6	2				
	10	了解問題(一)	54	1	50	1	4	48	了解問題(四)	4	3	3			
	11	正方形の模写	47	9	38	9		49	球捜し(二)	7		5			
	12	美の比較	53	2	46	2	4	50	五数の逆唱		1				
4	13	十三の数え方	49	7	35	6		51	六十語	4		3			
	14	三つの仕事	54	0	43	4	9	52	棉納試問	3		3			
	15	二つの重り	52	2	35	6	4	53	算数的推理						
	16	四数の反唱	53	1	29	9	2	54	抽象語の定義						
	17	長方形の構成	50	4	36	4	4	55	類似点を挙げる	2		2			
	18	用途による定義	48	5	25	10	2	56	閉された箱						
	19	手指の数	43	9	30	4	1	57	寓話の解釈(一)						
	20	四種の貨幣の名	41	10	18	12		58	時計の針を反対	3		3			
5	21	紐結び	32	17	72	0	1	59	紙切り問題(一)						
	22	絵の中の遺漏	53	5	34	1	11	60	七数の逆唱						
	23	左右の区別	51	1	26	4	8	61	六数の逆唱						
	24	了解問題(二)	52	7	24	2	10	62	国王と大統領の相異						
6	25	色の名	53	12	28	3	20	63	問題の解釈 想像によって 三角形の置換カード						
	26	了解問題(三)	36	7	13	2	7	64	寓話の解釈(二)						
	27	菱形の模写	35	6	10	2	5	65	思想の要点反唱						
	28	文章の反唱	43	1	6	5	4	66	抽象語の差異						
	29	絵の内容の叙述	35	5	8	4	6	67	八数の反唱						
7	30	差違を挙げる	41	1	4	4	4	68	七数の逆唱						
	31	五数の反唱	40	3	6	4	4	69	工夫力の問題						
	32	20から1迄逆唱	29	6	7	4	4	70	反対語の一致点						
	33	釣銭計算	15	16	3	1	2	71	三つの理由						
	34	五個の重さ	22	10	5	5	2	72	方位と距離						
8	35	用途以上の定義	25	5	3	3	3	73	紙切り問題(二)						
	36	書取	21	5	2	3	3	74	推理問題						
	37	時 日	16	8	2	2	2	75	九数の反唱						
	38	類似点	34	13	1	1	1	23							

い。

(E) テスト及びテストに対して(第7図)は、両者とも「普通」が一番多いが、普通児の場合、次いで「消極的」が多いのになら、天才級幼児の場合は、「興味を持ってする」「積極的」など、好ましい面を示した者が多い。

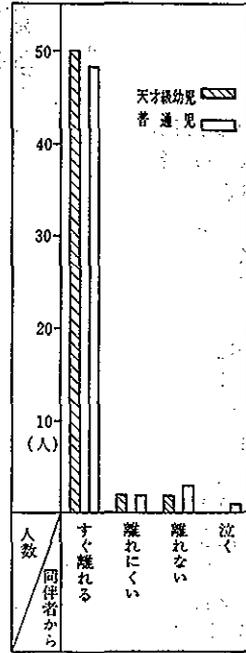
(F) 言語(第8図)については、天才級幼児の方が「明瞭」が多い一方、「不明瞭」も2人であるが、不明瞭な子が普通児と同数いたことが興味ぶかい。

(G) 動作(第9図)については、両者に、きわだった差は認められない。

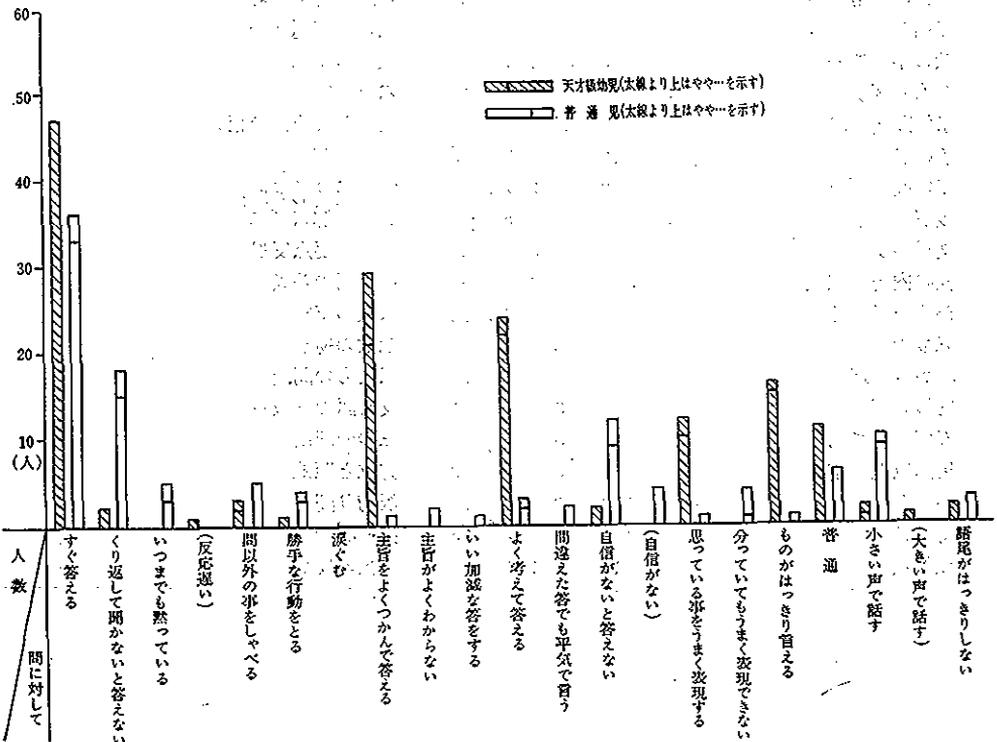
(H) また「その他」の欄を、年齢別にまとめてみたのが第4表である。この表によると、天才級幼児の場合、目立って多かったのが、「よく考えて答える」ということであった。一方、普通児の場合は「表現能力が劣る」というのが目立って多かった。

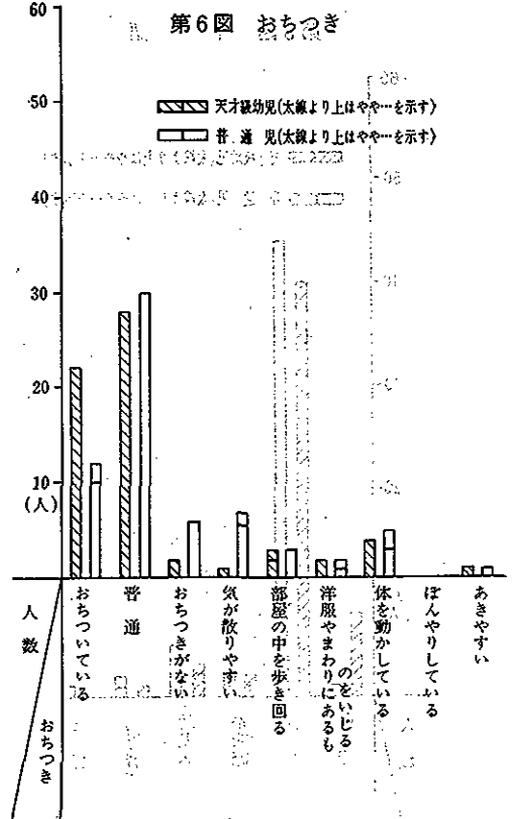
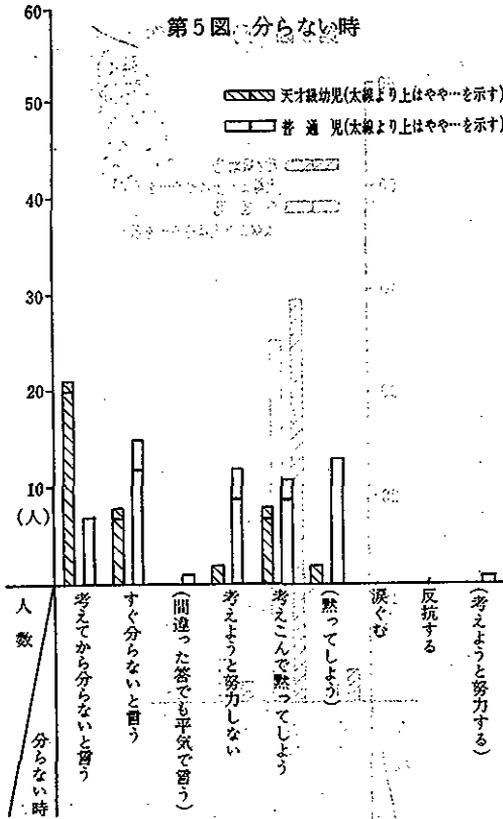
以上のことから、普通児に比べ、天才級幼児には、好ましい面を持つ子どもが多いことが、傾向として認められた。

第3図 同伴者から

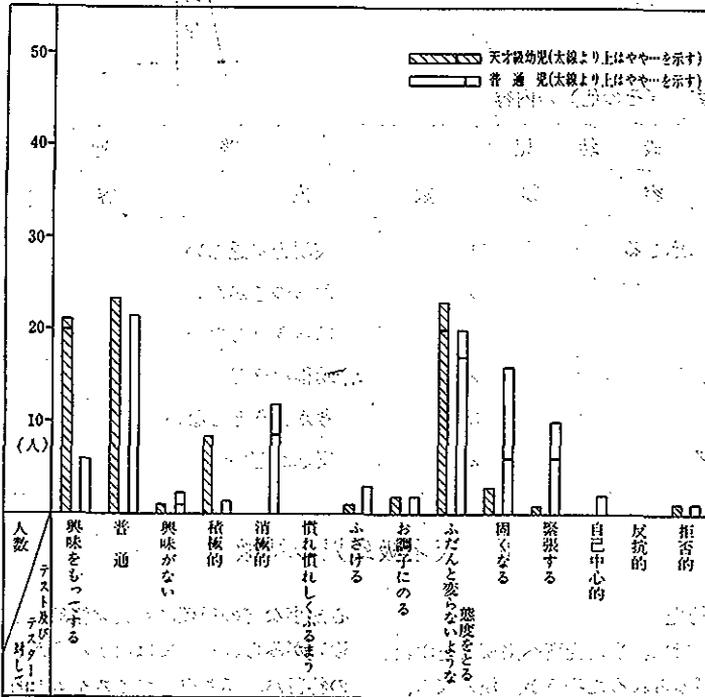


第4図 問いに対して

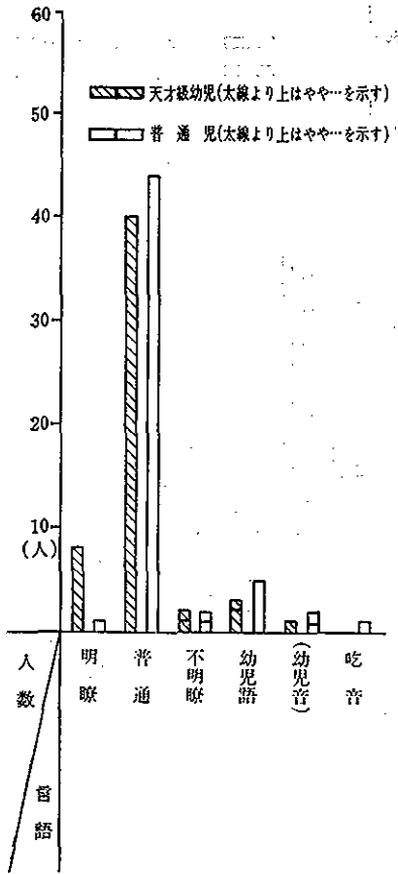




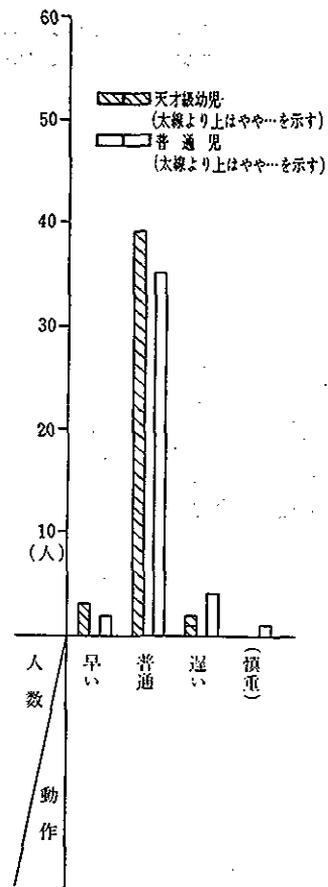
第7図 テスト及びテストに対して



第8図 言語



第9図 動作



第4表 (その他)の内容

天才級幼児		普通児	
内容	頻数	内容	頻数
よく考えてテストに応じる	11	表現力が乏しい	10
しっかりしている	9	おちつきがかい	4
よく考えて答える	7	はっきりしない	2
はっきりしている	2	幼稚な感じ	2
おちついている	2	考えようとしらない	2
とてもよく理解する	2	反応が遅い	2

II 天才級幼児の特徴

(1) 主訴と天才級幼児

天才級幼児と普通児とは、当研究所へ来所した主な理由に、何らかの違いがみられるだろうか。親の悩み、

心配事などの種類にも天才級幼児と普通児のあいだには違いがみられるのではなからうか。そこから天才級幼児の特質が、浮き出してくるかもしれないと思い、カルテ

表5 主訴の分類

主訴の分類	主訴の内容	天才級幼児		普通児		合計	
		♂	♀	♂	♀	天才級幼児	普通児
A	知能 知能テスト どの程度か	13 0	18 2	4 1	17 0	31 2	21 1
B	教育 就園 就学 進学	0 2 0	5 5 1	1 0 0	1 0 0	5 7 1	2 0 0
C	成績 知能が低いと言われたので(学校の集団 テストで) 成績がよくない 小学校で友達について行かない状態	1 0 0	0 0 0	0 2 1	0 3 0	1 0 0	0 3 1
D	学園 園題 校)で (幼 稚園 拒否 幼稚園で集団行動がとれない 学校へ行くと全然話をしない	0 0 0	0 0 0	1 1 0	2 0 1	0 0 0	3 1 1
E	性 質 外へ出ると消極的 引込思案 泣き虫で、積極性がだんだんなくなる 活発さに欠ける 集中力がない 穏健だと言われた 母親から離れない 甘える、依存的 我が強い 気が強い	0 0 0 1 1 0 0 1	0 0 0 0 0 0 1 0	1 0 0 1 0 1 0 0	0 3 1 0 0 0 0 0	0 0 0 1 1 0 1 1	1 3 1 1 0 1 0 0
F	躰 母親の言うことを聞かない 叱りすぎているかと心配 一人っ子 躰	1 0 0 0	0 0 0 0	1 0 1 1	0 1 5 0	1 0 0 0	1 1 6 1
G	言葉 吃音 幼児語 言葉がはっきりしない 言葉が悪くなった	0 0 0 0	1 1 0 0	0 0 1 1	0 0 0 0	1 1 0 0	0 0 1 1
H	健康 チック症 口蓋裂 排尿(夜尿、遺尿) 大便の失敗 食が細い 寝ごとをよく言う	1 0 0 0 0 0	0 0 2 0 2 0	0 1 0 0 1 0	0 2 1 1 0 0	1 0 2 0 2 0	0 3 1 1 1 0

の「相談事項」の欄から、主訴を分類してみたのが、第5表である。

この表で分るように天才級幼児の場合、主訴の50%強が単なる④知能診断であった。つまり、これといって子どもに問題点があるわけではないが、いったい自分の子

どもは、どの程度の知能を持っているのかということをも、診断してもらうために、やって来た者が多かった。

次に多いのは、⑩教育についてである。つまり就園、就学、進学についての相談である。これは「この子を某幼稚園(または某学校)を受けさせようと思うが、それ

だけの知能があるだろうか」といったような相談で、どちらかという、④知能診断に近い。この④と⑥の主訴からは、とくに子どもに問題があるとは思えないが、天才級幼児の場合、④と⑥を合わせると46人となり、全体の77%を占めている。それに比べ、普通児の場合は24人で40%であり、天才級幼児の場合の約半分である。

⑥成績についての主訴は、「成績が悪い」という相談であるが、普通児には6人もいた。そして天才級幼児にも1人、興味ぶかい主訴があった。その子は、小学校5年生の男の子であるが、学校の集団テストで知能が小学3年生程度であると言われたので、相談に来所したのだった。それにもかかわらず、この子は、当研究所で、鈴木ビネー式知能検査を施行したところ、IQ154と出て、天才級幼児と診断された。エジソン、ダーウィン、平田篤胤等も似たことが言われているが、学習の基礎能力である一般知能がIQ154もあって、成績が悪いと言って母親が心配している子(小学1年生)のいることは、興味のかいことである。

次に、⑦学校および幼稚園での問題についての主訴は、登園拒否とか、幼稚園に行くと言話をしないと、集団行動がとれないといった困った内容であるが、これは、普通児に5人いたのに対して、天才級幼児には1人もみられなかった。

⑧性質についての相談は、天才級幼児に5人、普通児に7人いたが、その内容をみると、両者のあいだに差がみられた。性質についての相談といっても、外へ出ると消極的だとか、泣き虫だとか、引込思案といった「弱い性質」についての相談は、普通児に6人いたのに対して天才級幼児には0人であった。反対に、我が強い、気が強いという「強い性質」の種類の相談は、普通児には0人であったが、天才級幼児には2人いた。このことから個人差はあるにしても、天才級幼児の特質の一面がうかがえる。

⑨躰についての相談は、排尿などの基礎的習慣の躰のことではなく、子どもの日常生活や、性質について、どう指導したらよいかといった種類のものである。ここでは、天才級幼児には、母親のいうことを聞かないという子どもが1人いるだけである。この主訴は、⑩の我が強いに入れてもよいと思ったが、それに対する躰という点を重視した相談であるため、ここに入れた。

また普通児には、1人っ子についての相談が6人あるのに対し、天才級幼児にはみられなかった。ところが、この天才級幼児群は、60人中20人が1人っ子であり、普通児群の場合は60人中15人で、かえって天才級幼児群に1人っ子が多いのである。

このことから天才級幼児は、普通児に比べ、1人っ子であっても、1人っ子の悪い意味での特徴(相談事項の対象となるようなもの)は、あまりなく、日常生活も、きわめて良いということがわかる。

⑩言葉についての主訴は、天才級幼児、普通幼児とも2人ずつであった。

また、⑪健康の欄で、天才級幼児でも排尿(夜尿、造尿)の相談が6歳台に2人いた。

(2) 出生順位と天才級幼児

出生順位が、子どもの知能に影響するであろうか。

第6表に示した通り、天才級幼児のうち、一番目に生まれた子どもは、43人(そのうち20人が1人っ子)で、全体の約72%を占める。しかし出生順位が早いから、天才級幼児である可能性が多いということでは全くない。普通児の場合も、一番目の子どもは36人(そのうち15人が1人っ子)であり、全体の約60%を占めている。このように、出生順位自体が子どもの知能に影響することは考えられない。ただ出生順位が非常に遅いということは母親が出生時に、相当高齢であることが考えられる。

第6表 出生順位

順位	天才級幼児		普通児	
	人数	%	人数	%
1番目	43	71.7	36	60.0
2番目	14	23.3	20	33.3
3番目	2	3.3	3	5.0
4番目	1	1.7	1	1.7
計	60	100.0	60	100.0

第7表 同胞数

人数	天才級幼児		普通児	
	人数	%	人数	%
1人	20	33.3	15	25.0
2人	34	56.7	33	55.0
3人	5	8.3	11	18.3
4人	1	1.7	1	1.7
計	60	100.0	60	100.0

第8表 両親の教育程度

知能程度 教育程度	父 親				母 親			
	天才級幼児		普通児		天才級幼児		普通児	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
高等教育	55	91.7	45	75.0	33	55.0	21	35.0
中等教育	4	6.7	12	20.0	27	45.0	38	63.3
初等教育	0	0.0	2	3.3	0	0.0	1	1.7
不明	1	1.7	1	1.7	0	0.0	0	0.0
合計	60	100.1	60	100.0	60	100.0	60	100.0

(3) 同胞数

それでは、同胞数すなわち何人きょうだいであるかということについては、どうであろうか。

第7表に示すように、同胞数2人の子どもは、天才級幼児に34人、普通児に33人おり、だいたい同数であるが1人っ子であるか、それとも3人以上であるかという見方をすれば、その比は、天才級幼児では20対5、普通児では15対2であり、天才級幼児の方が同胞数が少なく、とくに1人っ子が多いという傾向がみられた。しかし χ^2 検定によると、有意差は認められなかった。

(4) 両親の教育程度と天才級幼児

天才級幼児は、一般に、遺伝の面からも、環境の面からも、優れていると言われているが、この対象児の場合はどうであろうか。そこで両親の最終出身学校について分類してみると、第8表のようになった。この表における高等教育とは、大学、短期大学、高等専門学校、師範学校の教育を指し、中等教育とは、新制高等学校、新制中学校、旧制中学校、旧制実業学校などの教育を指し、初等教育とは、小学校専常科、高等科（高等小学校）の教育を指す。

この表によると、天才級幼児の場合、父親の93%、母親の55%が高等教育を受けていることがわかる。それに比べ、普通児の場合、父親の76%、母親の35%が高等教育を受けており、明らかに天才級幼児の場合よりも少なくなっている。

(6) 両親の職業と天才級幼児

子どもの知能と、両親の職業との関係は、どうであろうか。

第9表は対象児の両親の職業を分類したものであるが、この表からは、天才級幼児と普通児の間に違いを見つけることは出来ない。これは1つのことは、対象児として当研

第9表 親の職業

職業の種類	父 親		母 親	
	天才級 幼児	普通児	天才級 幼児	普通児
経営・管理・専門的職業	13	19		
事務・技術的職業	41	34	1	2
自営業	5	5	1	3
その他の職業			1	
無し（主婦）			57	55
不明	1	2		
合計	60	60	60	60

究所教養相談室に來所した者を選んだことに、その原因があると考えられる。すなわち当研究所の教養相談は、無料相談ではなく、相談と知能テストで1500~2000円の料金を払うしくみになっているので、來所する層は、だいたい中流階級以上で、しかも教育に関心を持っている家庭に限られてくるのである。またもう1つの原因として、東京という大都会の家庭であるということも考えられる。

要するに表から明らかなように、天才級幼児も、普通児も、父親の職業は、経営・管理・専門的職業、事務・技術的職業、および自営業で100%を占め、その他の職業が見当らなかった。

母親の職業についても、とくに変わったことはない。しかしターマン、村山貞雄、森重敏らの今までの研究報告をみると、父親の職業が頭脳労働を主とする専門的職業の家庭から、天才級幼児が多く出ているということがいえるようである。

第10表 出生時の両親の年齢と年齢差

親の年	父の年		母の年		親の年の差	父~母	
	天才級幼児	普通児	天才級幼児	普通児		天才級幼児	普通児
18			1		8		5
19					7	1	
20	1				6		
21					5		1
22			1	1	4	1	1
23	1		3	1	3	1	1
24			7	10	2	1	1
25	2	1	4	3	1	1	3
26	4	5	7	13	0	8	2
27	5	2	8	4	1	8	3
28	2	4	8	5	2	4	5
29	5	5	2	3	3	6	6
30	4	7	4		4	4	7
31	7	8	3	6	5	9	7
32	4	5	4	3	6	6	10
33	10	6	2	3	7	3	3
34	3	3	1	1	8	4	1
35	2	1	1	2	9	2	
36		3	1	1	10	1	1
37	1	1			11	2	
38	3	2	2	1	12		
39	1				13		
40		1			14		
41		2		1	15		
42	2	1			16		
43	1				17		
44	1						
45							
46		1					
不明	1	2	1			1	2
計	60	60	60	60		60	60

第11表 生まれた月

知能 生れ月	天才級幼児			普通児		
	人数	内訳		人数	内訳	
♂		♀	♂		♀	
1月生れ	5	2	3	3	1	2
2 "	9	4	5	1	0	1
3 "	6	3	3	2	1	1
4 "	4	0	4	5	3	2
5 "	1	1	0	6	1	5
6 "	5	0	5	9	3	6
7 "	6	1	5	9	4	5
8 "	7	4	3	5	2	3
9 "	4	1	3	3	0	3
10 "	6	3	3	4	1	3
11 "	3	1	2	6	3	3
12 "	4	1	3	7	2	5
計	60	21	39	60	21	39

第12表 出生状態

出生期		知能	
		天才級幼児	普通児
予より 定り 日早	30日未満	20人	21人
	30日以上	0	2
予より 定り 日遅	2週間未満	16	17
	2週間以上	8	2
予 定 日		10	11

父親の平均年齢31.9歳 (Med 31歳)、母親の平均年齢28.2歳 (Med 27歳) である。

ただ、天才級幼児の両親の年齢差は5年が一番多く、0年から6年に、わたって多くの出現率を示している。一方、母親の方が、父親より年上である夫婦が、12人(20%)もあり、とくに母親が8歳も年上である場合が、5人もいた。このように、この対象児においては、普通児の両親の方が、姉さん女房であるケースが多く、12人もあり、天才級幼児の場合は、その $\frac{1}{6}$ の2人にすぎない。

両親の年齢差の平均は、天才級幼児3.8歳、普通児2.6歳で天才級幼児の方が、1.2歳も多く、t検定で5%の有意差がみられた。

このことから、天才級幼児の方が、普通児よりも、両親の年齢差が大きいことが認められた。

しかし普通児でも、父親の方が17歳も年上であるというケースもあり、以上のような両親の年齢や年齢差が天才級幼児の出生ということの一般的よりどころになると

(6) 出生時の両親の年齢と天才級幼児

次に、出生時の両親の年齢や、年齢差については、どうであろうか。

第10表に示されるように、天才級幼児の出生時の父親の年齢は、27歳から33歳までが多くなっており、平均年齢は、31.5歳 (Med 31歳) であった。また出生時の母親の年齢は、24歳から28歳までが大部分を占めており、平均年齢は、27.9歳 (Med 27歳) である。普通児の場合も、天才級幼児の場合と、だいたい似た傾向にあり、

第13表 出生状態

出生状態	知能	天才級幼児		普通児	
		人数	%	人数	%
予定日		10	16.7	11	18.3
早い		20	33.3	23	38.3
遅い		24	40.0	19	31.7
不明		6	10.0	7	11.7
計		60	100.0	60	100.0
仮死	+	2	3.3	3	5.0
	-	47	78.3	35	58.3
	不明	11	18.3	22	36.7
計		60	99.9	60	100.0
正常		42	70.0	47	78.3
帝王切開		3	5.0	2	3.3
鉗子		5	8.3	3	5.0
逆子		3	5.0	0	0.0
不明		7	11.7	8	13.3
計		60	100.0	60	99.9

は思えない。

(7) 生まれた月と天才級幼児

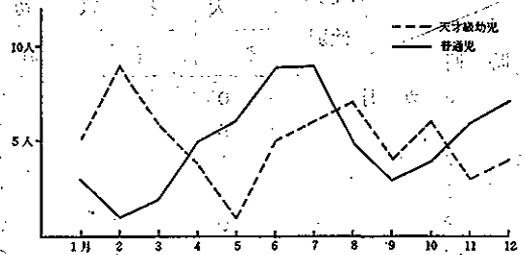
生まれた月が、天才級幼児の出現に影響するとは思えないが、参考のため天才級幼児と普通児を比べてみたのが、第11表である。

この表によると、天才級幼児には、2月生まれが60人中9人で最も多く、普通児には、6月生まれと7月生まれが60人中それぞれ9名ずつで最も多かった。しかし他の対象児の場合また違った結果が出るであろうし、これぐらいの人数では生まれた月が、天才級幼児の出現に関係する資料にはならない。なおこの数値を三点修正法で1回修正してグラフで示すと、第10図のようである。

(8) 出生状態と天才級幼児

次に出生状態についてみたのが第12~13表である。ま

第10図 生まれた月



第14表 出生時体重

出生時体重	知能	♂				♀				合計			
		天才級幼児		普通児		天才級幼児		普通児		天才級幼児		普通児	
		人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1.0~1.5kg未満													
1.5~2.0kg													
2.0~2.3													
2.3~2.5kg													
2.5~3.0		4	19.0	4	21.1	8	21.6	14	37.8	12	20.7	18	32.1
3.0~3.5		15	71.4	9		23	62.2	16	43.2	38	65.5	25	44.6
3.5~4.0		2	9.5	4	21.1	4	10.5	5	13.5	6	10.3	9	16.1
4.0kg以上													
計		21	99.9	19	99.8	37	99.7	37	99.9	58	99.9	56	100.0
不明				2		2		2		2		4	
平均		3,175kg		3,079kg		3,084kg		2,987kg		3,117kg		3,018kg	
東京都平均○		3,08kg				3,04kg				3,06kg			
全国平均◎		3,14kg				3,06kg				3,10kg			

注 ○ 東京都日赤病院における昭和35年の調査
◎ 厚生省母子衛生課による昭和35年統計調査

第15表 定首期

時期	知能 性別	天才級幼児				普通児			
		♂	♀	計	%	♂	♀	計	%
1 カ月		0	1	1	1.7	0	0	0	0.0
2		3	5	8	13.4	1	2	3	5.0
3		13	21	34	56.7	10	21	31	51.6
4		1	3	4	6.7	0	3	3	5.0
5		0	0	0	0.0	0	0	0	0.0
6		0	0	0	0.0	1	0	1	1.7
7		0	0	0	0.0	0	1	1	1.7
不 明		4	9	13	21.7	9	12	21	35.0
合 計		21	39	60	100.2	21	39	60	100.0

第16表 おすわり

時期	知能 性別	天才級幼児				普通児			
		♂	♀	計	%	♂	♀	計	%
5 カ月		0	2	2	3.3	0	2	2	3.3
6		4	2	6	10.0	0	4	4	6.7
7		1	3	4	6.7	0	1	1	1.7
8		0	1	1	1.7	0	1	1	1.7
9		0	0	0	0.0	0	1	1	1.7
10		0	0	0	0.0	1	0	1	1.7
普 通		11	18	29	48.3	10	15	25	41.7
早 い 方		1	5	6	10.0	1	2	3	5.0
不 明		4	8	12	20.0	9	13	22	36.7
合 計		24	39	60	100.0	21	39	60	100.2

ず出生日は、天才級幼児の方が予定日より遅かった者がいくぶん多かった。そのなかでも第12表のように2週間以上も遅れた過期産児が8人もいるのに、30日以上早かった早期産児が0人であったことが目だった。

また第13表に示したように、仮死状態で生まれた者2人が天才級幼児の仲間入りをしている。

一般に天才級幼児は異常分娩がほとんどないと思われやすいが、この対象児では、第13表に示したように、正常分娩は、天才級幼児に42人(79.2%)、普通児に47人(90.4%)と、かえって普通児の方が多く、難産を伴う帝王切開、鉗子分娩、逆子が11人(21.8%)もいた。このことから、異常分娩でも天才児が出現することが統計的に証明される。

(9) 出生時体重と天才級幼児

少し資料が古い(昭和35年)が、東京都(日赤病院)や全国における発育標準の標準体重は、第14表の下欄に

示した通りである。天才級幼児の出生時体重は、男女共に東京都と全国の発育標準体重よりやや上まわっているが、普通児の場合、男女共にやや下まわっている。

このことは、傾向として、天才級幼児の方が普通児より、出生時の体重が、やや重いものが多いということを示している。

(10) 生育歴と天才級幼児

発育が順調であることが、知能や性格にも、良い影響を与えることが考えられる。

そこで、首のすわり、おすわり、ひとり歩き、話し始めの面から、カルテをまとめてみたのが、第15~18表である。

常識的には、普通、首のすわりは3~4ヶ月、おすわりは6~7ヶ月であるが、第15~16表に示したように、天才級幼児の方が普通児よりも、その時期が早い傾向にある。天才級幼児の場合には、首のすわったのが5ヶ月以後

第17表 ひとり歩き

時期	知能性別		天才級幼児				普通児			
	♂	♀	計	%	♂	♀	計	%		
9カ月	0	1	1	1.7	0	1	1	1.7		
10 "	1	10	11	18.3	2	3	5	8.3		
11 "	6	3	9	15.0	1	7	8	13.3		
12 "	6	9	15	25.0	3	8	11	18.3		
13 "	3	4	7	11.7	1	4	5	8.3		
14 "	3	8	11	18.3	4	3	7	11.7		
15 "	2	4	6	10.0	3	8	11	18.3		
16 "					2	1	3	6.0		
17 "					1	0	1	1.7		
18 "						2	2	3.3		
19 "						1	1	1.7		
20 "										
21 "										
不明					4	1	5	8.3		
合計	21	39	60	100.0	21	39	60	99.9		
平均値	12.3	12.2	12.2		13.5	13.1	13.2			
中央値	12	12	12		14	12.5	13.5			
最早値	10	9	9		10	9	9			
最遅値	15	15	15		17	19	19			

の子どもは1人もいない。しかしおすわりの方は、8ヶ月になってすわった子が1人いる。(9ヶ月以後にすわった者はいない。)

また第17表に示したように、ひとり歩きの平均値は、天才級幼児で12.2ヶ月、普通児で13.2ヶ月と約1ヶ月、天才級幼児の方が早い。また天才級幼児においては、一番遅い子どもでも、1年3ヶ月にはひとり歩きをしている。(これに比べ普通児には、16ヶ月以上かかった者が、7人、普通児全体の11.7%いる)

話し始めの時期は、その時期についての親の判断が主観的になることから、親の記憶によった場合は信頼度が低い。第18表は親の言う通りを記入したものであるが、これによると普通児の場合18ヶ月(1年半)が多かった

第18表 話し始め

時期	知能性別		天才級幼児			普通児		
	♂	♀	計	♂	♀	計		
普通	1	5	6	4	9	13		
早い方	1	5	6	3	3	1		
遅い方	2	0	2	1	0	1		
始歩前期	1	0	1	0	0	0		
5カ月	0	0	0	1	0	1		
6 "	0	0	0	0	0	0		
7 "	1	0	1	0	1	1		
8 "	0	2	2	0	2	2		
9 "	1	0	1	0	1	1		
10 "	0	2	2	0	1	2		
11 "	4	5	9	0	3	3		
12 "	6	12	18	3	8	11		
13 "	0	0	0	0	0	0		
14 "	0	1	1	0	1	1		
15 "	2	1	3	0	1	1		
16 "	0	2	2	0	0	0		
17 "	0	0	0	1	0	1		
18 "	0	2	2	3	3	6		
19 "	0	0	0	0	0	0		
20 "	0	1	1	0	1	1		
21 "	0	0	0	0	0	0		
22 "	0	0	0	0	0	0		
23 "	0	0	0	0	1	1		
24 "	0	0	0	0	2	2		
...								
30 "	2	0	2	1	0	1		
不明	0	1	1	5	2	7		
合計	21	39	60	21	39	60		

り、5ヶ月で話しはじめた子がいるなどしてあまり頼りにならないことが分る。しかしそれにしても天才級幼児の方が、普通児よりも早い傾向にあることがうかがえる。

テスト中の行動記録

氏名
 検査日 昭和 年 月 日
 記録者名

同伴者から……すぐはなれる はなれにくい はなれない 泣く
 問 対し……すぐ答える くり返してきかないと答えない いっまでも黙っている
 問以外の事をしゃべる 勝手な行動をとる 涙ぐむ
 主旨をよくつかんで答える 主旨がよく分らない
 いい加減な答をする
 よく考えて答える 間違えた答でも平気でいう 自信がないと答えない
 思っている事をうまく表現する 分っているもうまく表現できない
 ものがはっきり云える 普通 小さい声で話す 語尾がはっきりしない
 分らない時……考えてから分らないという すぐ分らないという 考えようと努力しない
 考えこんで黙ってしまう 涙ぐむ 反抗する
 おちつき……おちついている 普通 おちつきがない 気がちりやすい
 部屋の中を歩きまわる 洋服やまわりにあるものをいじる
 体を動かしている ぼんやりしている あきやすい
 テスト及び……興味をもってする 普通 興味がない 積極的 消極的
 テスターに
 対し なれなれしくふるまう ふざける お調子にのる
 ふだんと変らないような態度をとる 固くなる 緊張する
 自己中心的 反抗的 拒否的
 言 語……明瞭 普通 不明瞭 幼児語 吃音
 動 作……早い 普通 遅い
 そ の 他……

また話し始めの時期は、一般には 14～5 ヶ月であるが、天才級幼児でも18ヶ月が2人、20ヶ月が1人、30ヶ月が2人いる。30ヶ月とは2才半ということであり、2才半頃に話しはじめた天才児が60人に2人もいることは

注目に値する。

なお以上の生育歴を概括すると、発育状態については個人差があるにしても、天才級幼児の方が普通児よりも発育が早い傾向にあると言える。

Study on Mentally Superior Children

Dept. 5 Sadao Murayama
Kimiko Ueno

1. Purpose and Method

The purpose of this study is to know the distinctive features of mentally superior children.

Sixty children (over 3 years old) with IQ score of 150 and more (male 21, female 39) were picked up from among 5,722 children who were brought to Nippon Aikku Research Institute for the Care of Mothers and Children in Tokyo for educational consultation in 1966 and 1967 and they were compared with another group of 60 children (male 21, Female 39) with IQ score of 97~103 also picked up from among 5,722 children, and their characteristics were studied.

Japanese modification of Binet Intelligence Test was closely administered to these children, most of whom were the children of above middle class families in Tokyo. Miss Keiko Taniguchi worked together for this study.

11. Findings

1. The items especially done well by mentally superior children were the following 12 ones :

- Repeating a 3 syllable sentence
- Comparison of short and long lines
- Counting 4 objects
- Definitions
- Repeating 4 digits
- Naming 4 kinds of coins
- Discrimination between right and left
- Question of comprehension
- Repeating an 8 syllable sentence
- Repeating 5 digits
- Finding similarities
- Telling the names of bird, fruit and animal

2. The items which showed no difference between the mentally superior and average children were :

- Making rectangle
- Tying a string
- Finding a mutilated part in the picture
- Calculating the change

3. The behaviors particularly noted during the testing among the mentally superior children were :

- Gave an answer after thinking over
- Gave an answer grasping the point well
- Expressed pertinently what they thought
- Could tell clearly

4. The chief problem of the average children consulted about was on their weak dispositions, while that of the mentally superior children was on their strong qualities.

5. The mentally superior children advanced in the ages of head stability, walking and speaking comparing with the average children.